小学校・幼稚園教員養成のためのピアノ指導法(2)
—学生によく見られる表現の誤り—

竹内　アンナ

Guidance for Piano Lesson Methodology for Students in Elementary and Kindergarten Education Courses : Improper Expressions often Shown in Students' Performance

Anna　TAKEUCHI

小学校から高校までの過程におけるピアノの学習経験の有無は，20年前と比較すると，その比率は正に逆転したと言える。初めてピアノに触れる学生でも，授業を始めて一ヶ月も経つと，ピアノを弾く指の動きが軽くなっているのがわかる。学生全体に，ピアノを弾くことに抵抗がなく，またテレビドラマの影響もプラスとなって，ピアノが生活の中に浸透しているようにも思える。指導する側としても，学生の演奏への期待は増すばかりである。ところが，実際に教材を使ってピアノの授業を始めてみると，指は動くものの，楽譜を正確に読み取る力が非常に弱いことがわかる。学生がなぜ楽譜を正確に読み取ることができないのか。本論では，授業で使用する楽譜『幼児の音楽教育』（教育芸術社　2000年）より，歌唱教材9曲を取り上げ，学生の視点から，リズム・音程・休符に関する誤りをとらえ，正しい演奏表現について考察した。

1．はじめに

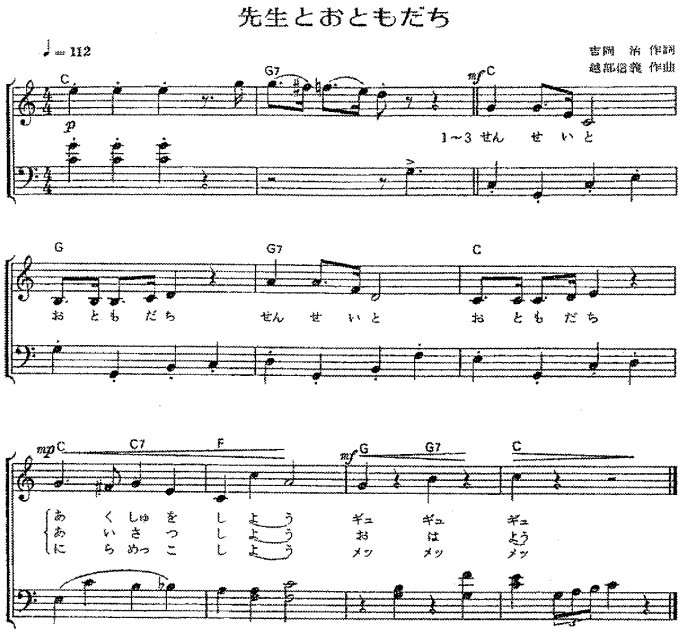
子供の頃にピアノの学習経験があるかないかを，25年前と，ここ10年間の学生とで比較してみると，その割合は完全に逆転したと言える。かつての学生は，ピアノの学習経験のある者は皆無に等しく，殆どの学生が先ず始めに初心者のためのピアノ教則本から学ばなければならなかった。ところがこの10年で，学生達の生活環境は大きく変わり，幼児期から高校生活までの過程において，多少でもピアノ学習の経験をしている者が半数を超えるようになった。まったくの初心者は全体の3割程と思われる。ところが，ピアノの学習経験があるにもかかわらず，演奏に正確性の欠ける学生の多いことが気になる。なぜ，学生たちが正確に演奏することができないのか。多くの学生の指導を通して分かってきことは，誤りに一つの共通性があること，そしてその誤りは，その曲特有に起こるものではなく，曲が替わっても，学生は同じ間違いを繰り返すということである。

本稿では，講義で使う教材楽譜『幼児の音楽教育』（教育芸術社　2000年）の学習課題よ

り9曲を取り上げ，問題別に誤りの原因と，正しい表現の捕らえ方について述べる。

2．リズム

譜例1.



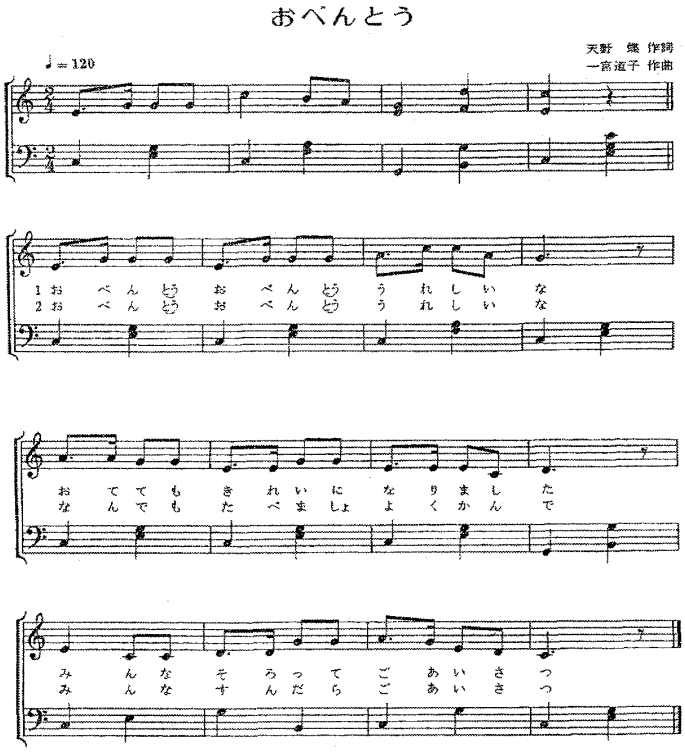
譜例1.「先生とおともだち」

前奏1小節目，右手4拍目の付点8分休符の長さと，16分音符Gの長さを正確に配分して弾くことができない。付点8分休符が付点のない8分休符の長さになり， Gの音を8分音符の長さで弾いてしまうのである。ここは付点8分休符と16分音符との長さの比率が3：1であることを理解することが必要である。それによって，正確にリズムを刻むことができる。

次に，前奏2小節目，左手3拍目と4拍目にかかる，8分休符と付点4分音符Gの長さの扱いが曖昧となり，8分休符を4分休符に，付点4分音符を4分音符ととらえて弾いてしまう。これは，おそらく学生が視覚的に感じてしまうことからくる誤りで，最後にある一つの音符を，単純に1拍であると解釈し，鍵盤に指をおろしてしまうことから起きるものと考えられる。ここは，右手最後のDと8分休符，そして4分休符が3拍と4拍に区切れること，また，左手付点4分音符Gが3拍目に入ることに気付くことが大切である。

三つ目に,3段目，右手1小節目8分音符Fisを16分音符に扱い弾いてしまう学生が多いが，前のG4分音符が1拍半であることをしっかり認識することが大事である。

譜例2.

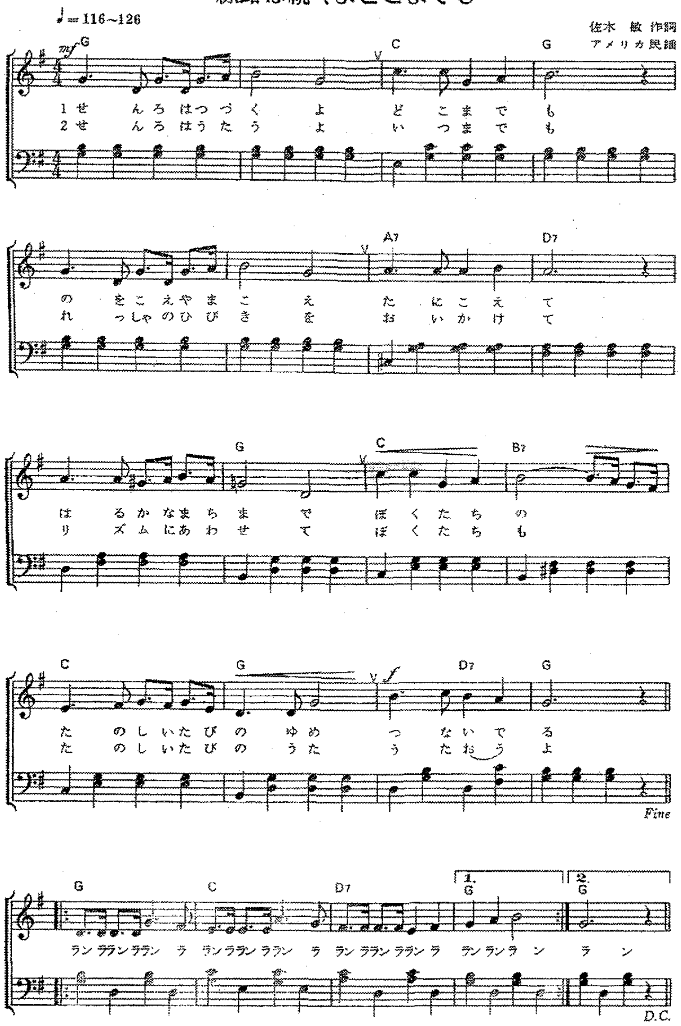


譜例2.「おべんとう」

前奏一小節目と歌の部分のすべての小節において（13･14･16小節を除く），各小節2拍目，8分音符2つを同じ長さにとらえることができず，1拍目と同様の付点のリズムで弾いてしまう学生が多い。これは，すべての小節にわたって1拍目が付点のリズムであるために，2拍目も同様のリズムで指が動きやすいということが考えられる。しかし，ここでは1拍目と2拍目のリズムの違いを把握し，明確に表現してもらいたい。1拍目の付点のリズムのすぐあと，8分音符2つを均等に弾くためには，特に1つ目の8分音符を長めに保持するように，指先でコントロールする必要がある。そして最後に2つの音が均等に響いているかを，自分の耳でよく確かめることが大事である。

譜例3.

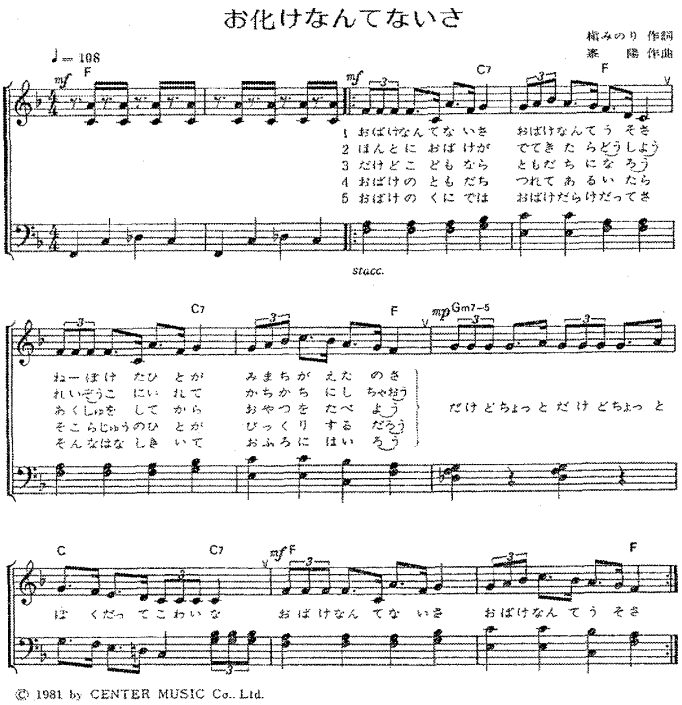
線路は続くよどこまでも



譜例3.「線路は続くよどこまでも」

1・3・5・7・9・13・14・15・17・18の各小節にある付点4分音符と8分音符の組み合わせの部分で，リズムを正確にとらえることができず，4分音符が複付点4分音符の長さとなり，8分音符が16分音符の長さになってしまう。ここは，付点4分音符を1拍半，8分音符を半拍になることをよく理解し，弾かなくてはいけない。「おべんとう」と同様に，正確なリズムが表現できるように，それぞれの音の長さを理解し，弾く瞬間には，指先のコントロールも必要となるので注意することが肝要である。

譜例4.



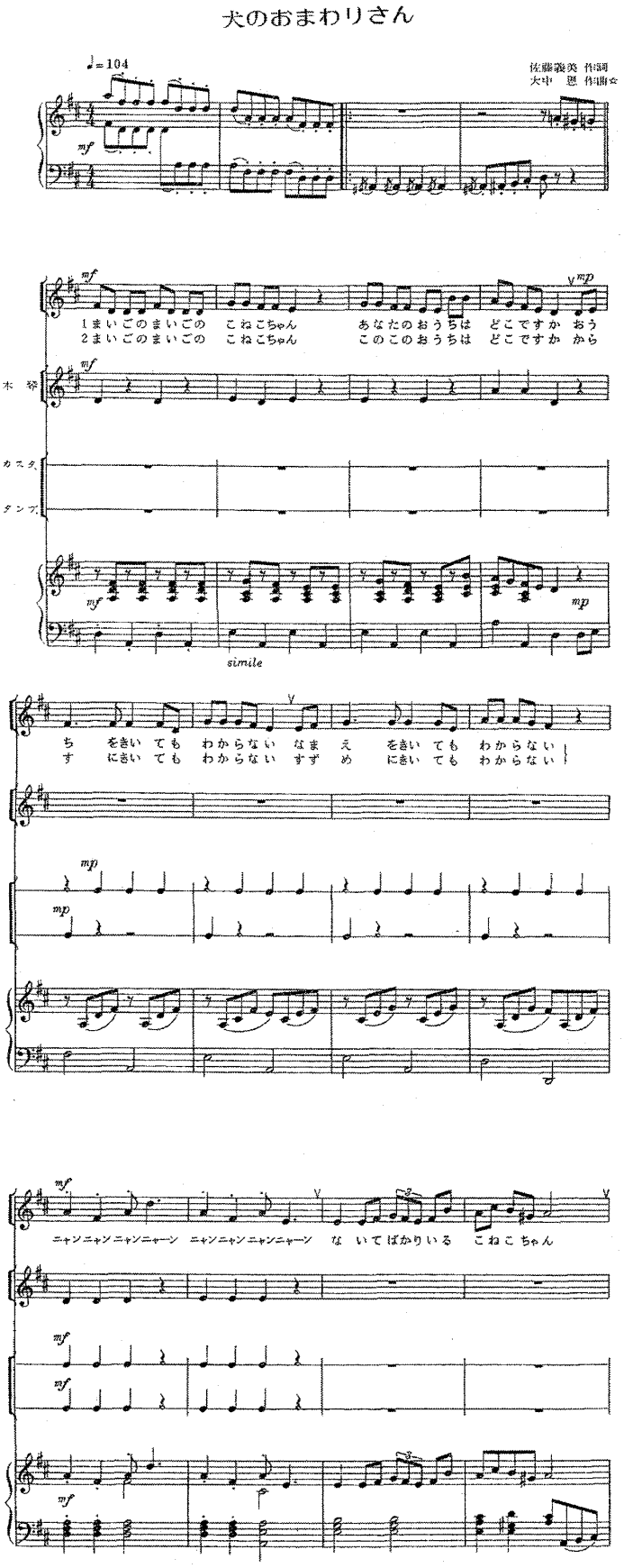
譜例4.「お化けなんてないさ」

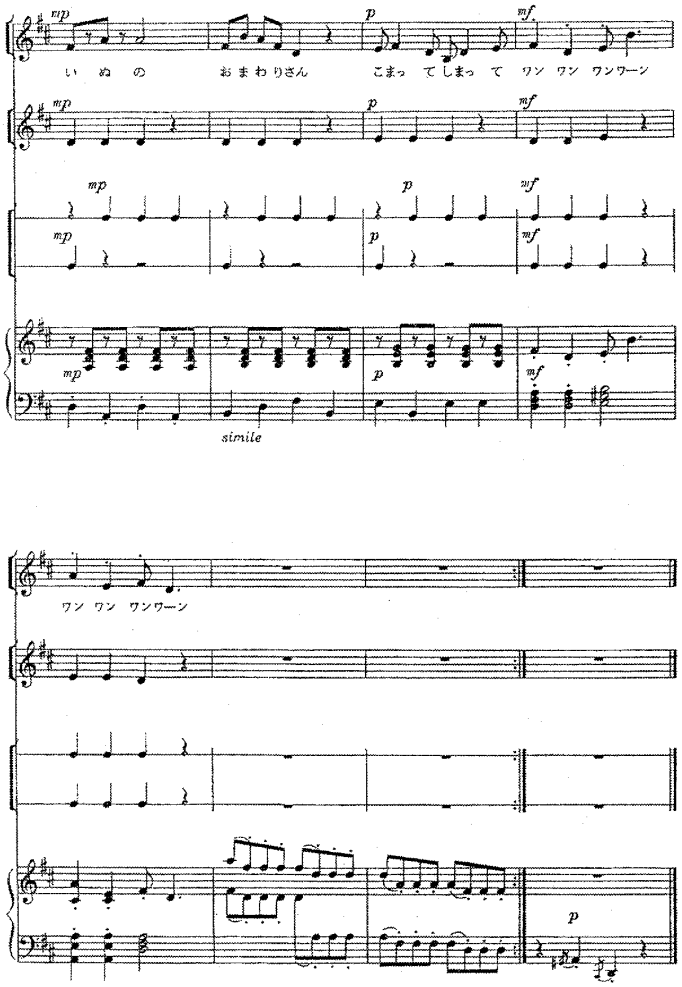
前奏1・2小節目，左手4分音符4つの間に，右手の付点8分休符と16分音符の，同じ組み合わせのリズムを4回，正確に繰り返さなければならないが，そのリズムが曖昧になる。付点8分休符が8分休符の長さとなり，16分音符が8分音符の長さになってしまう。「先生とおともだち」の前奏部分と同様に，長さの比率が3：1になることを最初に理解し，長さを正確にきざみ，弾かなければいけない。

上記4曲で取り上げたリズムについて，共通する問題点は，音符と休符の長さの相対関係がつかめていないことであり，そしてそのために，リズムを正確にとらえることができず，バランスの悪い曖昧なリズムで演奏していることがわかる。

3．音程

譜例5.


犬のおまわりさん
♩=104
佐藤義美 作詞
大中 恩 作曲
1まいごのまいごの　こねこちゃん　あなたのおうちは　どこですか　おう
2まいごのまいごの　こねこちゃん　このこのおうちは　どこですか　から
木 琴
カスタ
タンブ
simile
ち　をきいても　わからない　なま　え　をきいても　わからない
す　にきいても　わからない　すず　め　にきいても　わからない
ニャンニャンニャンニャーン　ニャンニャンニャンニャーン　な いてばかりいる　こねこちゃん

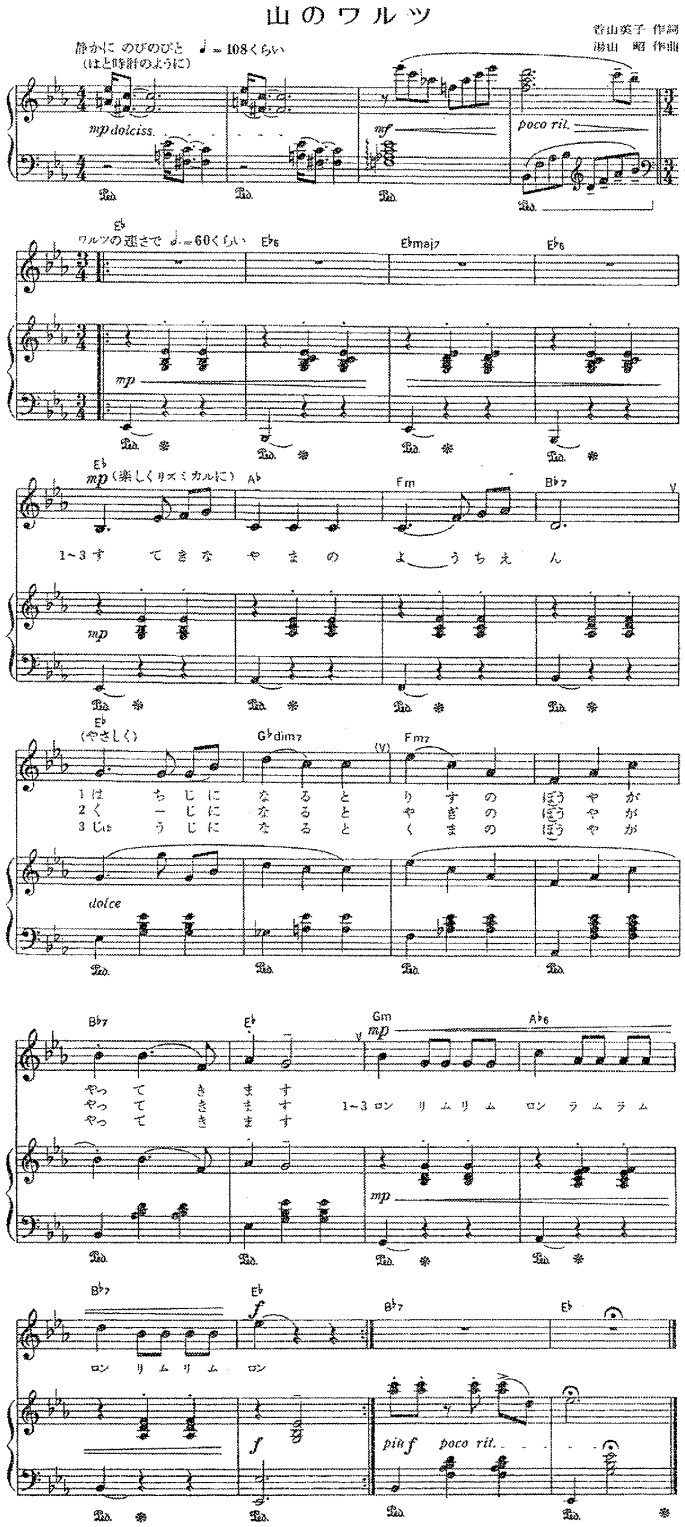


譜例5.「犬のおまわりさん」

15小節目，4拍目のFisからHへの“いる”と歌うところで，Hの音がどうしても下がる傾向にある。4度音程が歌いづらいということもあるが，そこは，伴奏の右手部分が歌の旋律と同一になっていることから，歌は付けずにピアノで旋律を何度も繰り返し弾き，旋律をよく聴いて，その音程を確実に耳で覚えることが必要である。

次に19小節目の“こまってしまって”と歌うところでは，6つの音すべての音程が曖昧となって，その結果，旋律が不鮮明となり聴き取れないのである。なぜこの部分が，これほど学生にとって歌いづらいのか。原因としてひとつ考えられることは，ピアノ伴奏が和音コードEm（E・G・H）で奏するため，耳元にその音が強く響き，旋律音E・Fis・Dの音がとらえきれないのではないかということである。特にFisとDは，ピアノの響きの中からはまったくとらえることができないので，歌の音程が著しく不安定となる。初めに，ピアノ伴奏を付けずにメロディーだけをピアノで何度も弾き，その音に合わせて繰り返し歌って，その音の流れを捉えることが大切である。

譜例6.

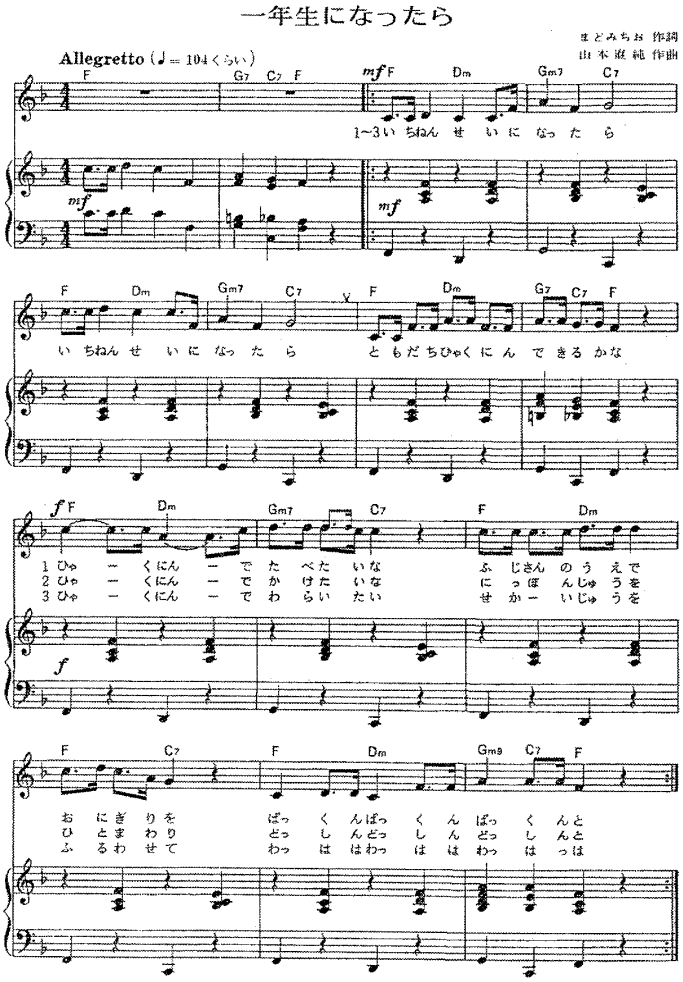


譜例6.「山のワルツ」

1小節目と3小節目の付点4分音符から8分音符へ，旋律が4度上がるところでは，確実な音程が取れず，どちらも8分音符が下がりぎみになる。「犬のおまわりさん」でも，4度音程

の音の跳躍が曖昧になりやすいことを指摘したが，ここでも同様なことが起きていると考えられる。そして，その音程の曖昧さは，1小節目より3小節目の方により顕著に現れている。もう少し幅を広げて比較をしてみると，その後の3拍目の2つの8分音符の音程が，それぞれ長2度（F・G），短2度（G・Ais）と異なり，短2度の方が不安定になりやすく，そのために前の音も影響を受け，より不安定となることがわかる。ピアノ伴奏は，その部分の旋律をまったく奏しないので，旋律だけをピアノで繰り返し弾き，その響きをよく覚えて，確実な音程で歌えるように練習する必要がある。

譜例7.



譜例7.「一年生になったら」

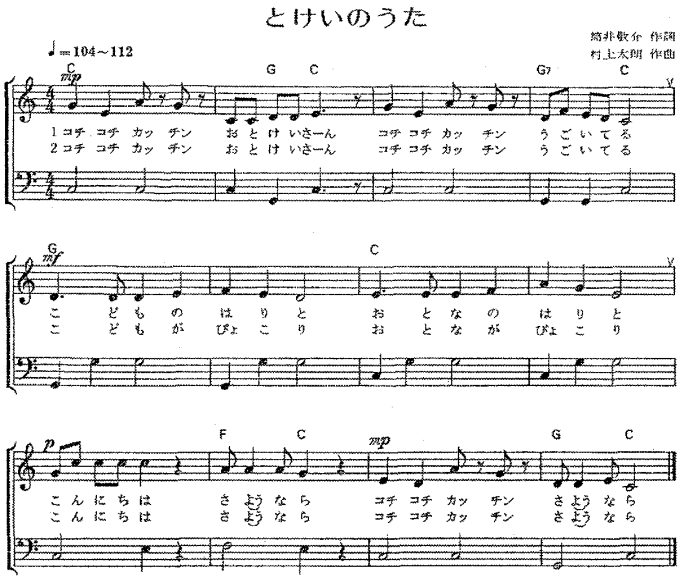
7小節目，1拍が付点8分音符と16分音符の組み合わせによるリズムの中で，1拍目Cから2拍目Fに上がる音が安定せずやや下がり気味になり，次の音Aも連鎖して下がってしまう。13小節目，3拍目から4拍目も同様にCからFisの音程が安定せず下がる傾向にある。ここも4度音程で跳躍しているため歌いづらいことがわかる。これも先程と同様に，旋律だけを

ピアノで繰り返し弾いて音程を確実につかみ，歌えるように練習することである。

上記3曲で取り上げた音程について共通する問題点は，ピアノ伴奏の中に旋律がまったく扱われないため，歌の音程がピアノの響きに左右され，不安定になることである。幼児を対象とした歌の場合，ピアノ伴奏の右手部分は旋律を弾くように作られている曲が多いが，時としてその曲の特性をより一層生かすために，旋律から離した形で伴奏が作られることもある。歌の旋律の個々の音を正確にたらえるためには，旋律のみをピアノで繰り返し弾き，音に慣れてからピアノと合わせて歌うという練習が必要である。

4．休符

譜例8.



譜例8.「とけいのうた」

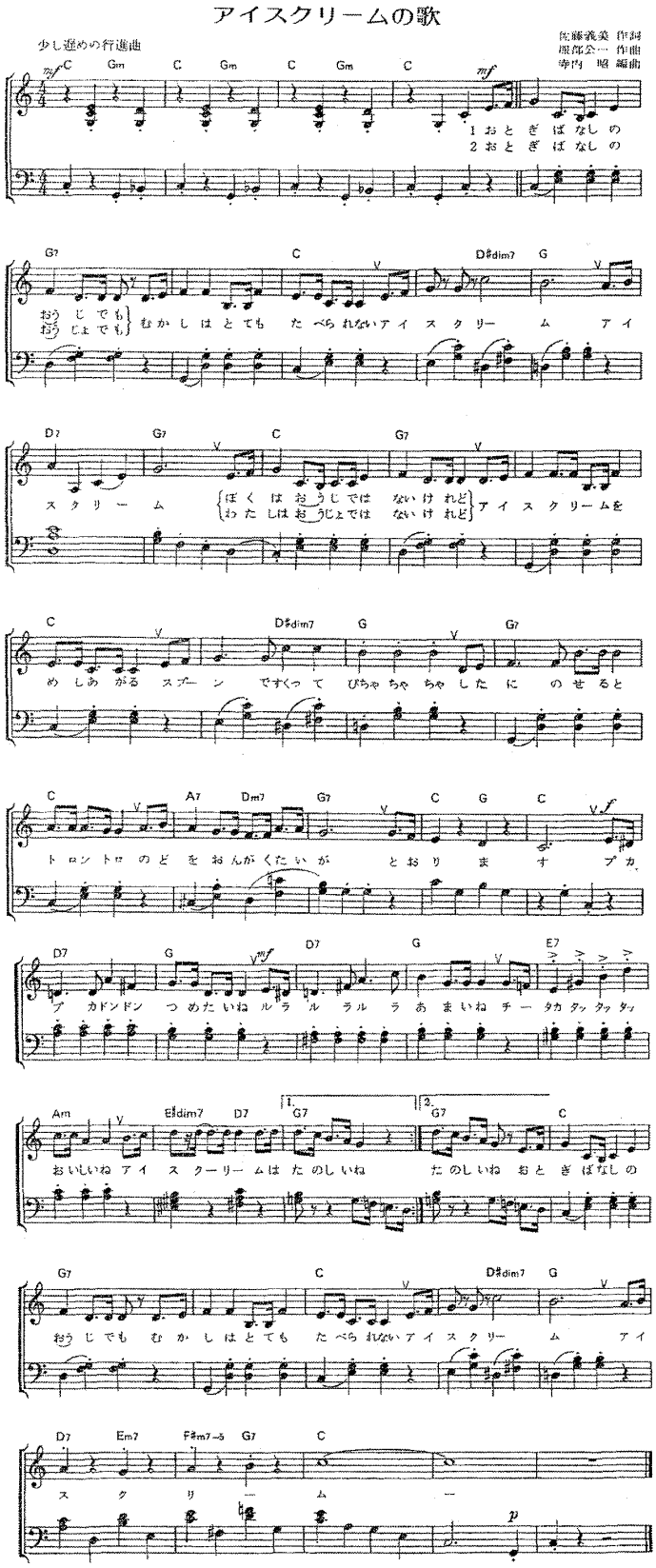
1小節目，歌詞の“カッチン”の“チン”が“チーン”と延びてしまい，8分音符Gが4分音符の扱いとなり，2つの8分休符のうち，あとの8分休符は表現されないことになる。2小節目も同様に，歌詞“さーん”がさらに長くなり，付点4分音符が2分音符の扱いにして歌ってしまう。また,9小節目と10小節目では,4拍目の4分休符のあることを考慮せず,歌詞“は”“ら”を1拍以上延ばして（殆ど2拍に近い）歌うので重い表現となる。3小節目と11小節目は1小節目の場合と同様の誤りがあるので注意する必要がある。

譜例9.「犬のおまわりさん」

17小節目，歌詞“いぬの”の“い”と“の”の間に8分休符があるので，そこは，言葉をひとつずつはっきりと切って，8分休符のあることを意識して歌わなければいけない。休符

があるにもかかわらず延ばして歌ってしまうことが多く，重い表現になるので気をつけることが大切である。

譜例9.



譜例9.「アイスクリームの歌」

9小節目と38小節目はどちらも同じ歌詞と音符の配列であるが，1拍目の歌詞“スク”のところでは，“ス”のあとの8分休符は“ス”を短く切って歌えるが，“ク”のあとの8分休符は“クー”と延びてしまい休符が取れない。23小節目，歌詞“りま”のところでは，“り”と“ま”のあとは4分休符があるので1拍おきに休符を取らなればならないが“り”も“ま”も長く延びて2分音符の扱いとなって休符が取れない。31小節目，1拍目から2拍目にかけての16分休符とそのあとの16分音符のタイは，リズムが細かく弾きづらいところではあるが，音符と休符の長さの配分を理解し，明確に表現する必要がある。

上記3曲で取り上げた休符について，共通する問題点は，先ず，譜読みが正確に行われていないことである。その原因は，音符や休符の理解が充分でないこと，あるいは勘違いをしていながら気付かずに弾いていることである。間違った解釈をしていないか，楽譜を1小節ずつ丁寧によく読み（見て），音符と休符の長さを確認してから演奏の準備に取り掛かることが肝要である。

5．おわりに

楽譜を読むということは，楽譜をピアノの譜面台に置いたら，まず始めにピアノ演奏準備として行う学習のことで，その曲を何調で，何拍子で，速度はどのくらいで演奏したら，その曲を表現できるか，曲のイメージをつかむことである。次に行うことは，楽譜に書かれていることを音に出すことである。ここで初めて音を出すのである。はじめは右手のみ，しかも一小節ずつ，そしてその一小節の中を慎重に目でとらえて，一音符ごと確認することが譜読みの鍵である。正しい演奏ができるか否かは，すべてこの譜読みの確認で決まる。音楽を楽譜から感覚的にとらえることはやさしいが，それは専門的にかなり熟知し，深いところまで理解した上でのことである。教育現場で子供たちに音楽指導を行うには，譜読みにおいて，楽譜に忠実で正確に表現することが何よりも大切である。学生は，カラオケに行き，熱狂的に歌い，CDで好きな歌手の歌を聴きながら，口ずさむといった楽しみ方をする。しかし，これと同じような感覚で教材に取り組めば，たちまち音楽は崩れ，また安易な譜読みにより，表現に誤りが多くなるだけである。リズム・音程・休符について，演奏者は慎重に楽譜を読み，十分に理解し，そして正確に演奏することにより，譜読みの誤りを防ぎ，正しくきれいな音楽表現を行うことができる。

今回の研究は，本学での担当授業科目「器楽Ⅰ」及び「器楽Ⅱ」において，学生がひとつひとつの曲と取り組む中で間違えるさまざまな事柄について，なぜそのような誤りが起きてしまうのか，そしてその要因が何であるのかを探ることを目的とし，指導の中で学生の演奏状態を細かく記録に取り，その分析結果をまとめたものである。

引用文献（楽譜）

『幼児の音楽教育』教育芸術社　2000年

参考文献

『幼児の音楽教育』教育芸術社　2000年